

高 橋 省 己 著

「幼 児 教 育 心 理 学」

宇 田 川 照 子

この本のおもな内容は、幼児の成長発達に関するものである。しかし、この本は、たんに成長発達の心理学的事実の敘実におわらず、その事実にもとづいて、教育目標に効果的に達するための心理的技術をも示そうとしている。これが、この本の

特徴であり、また幼児教育心理学なる題名のゆえんでもある。著者はこの本で、幼児の成長発達の問題を、主として発達心理学的立場から考察している。すなわち、成長発達を、情緒の発達、知能の発達といったように、分析的な、また量的変化中心のとり扱い方をしている。しかし全く総合的なとり扱いをしていないわけではなく、バースナリテイの発達を社会心理学的に考察している。

第一章から第七章までは、身体及び運動機能・情緒・知性・知能・言語・数概念・社会性等の発達について、内外の科学的資料を紹介されている。また各章ごとに発達にもとづいた正しい指導のありかたが述べられている。とくに、第一章の運動能発達検査法の紹介や、左利きの双手教育への導き、第二章の、情緒不適応とその予防―欲求不満に対する耐忍性の訓練の必要など―、第三章の融合的知覚やアミニズム等の幼児心性の特質や、知能検査法の歴史的発

達や、現在おこなわれている検査法の紹介、第五章の言語の発達段階や言語教育のあり方、発音発達標準検査の試み、第六章の数概念の正しい指導法、第七章の基本的習慣の発達基準や習慣形成にかんする自発的使用の原理や文化適応の理論、社会生活能力検査法等、実際に保育している者にとって非常に得るところがある。

第八章はバースナリテイの形成であり、その生物身体的理論―クレッチメルやシエルドンの体型（体格）と性格との相関の理論―や生物・社会的理論では、精神分析学的理論・授乳のしかた、排泄の統制、生殖器にたいするしつけかた等が後の性格形式に影響するとう理論―や、親子関係と子どもとの性格に関する研究―暖さ、強さ、一貫性という三つの次元の組合せによって出来る家庭のシンタリテイ（集団の基本的行動傾性の総体）が子供の性格形成に影響するという研究―が紹介されている。このあたりは、人格形成の重大な時期にある幼児を保育する私

たちの、一説に値する記述である。第九章十章は幼児の絵と粘土細工を扱い、その能力の発達や絵画指導の歴史をたどりつつ、今日の、円満な人格形成のための絵画指導について述べている。別章では、幼児教育の歴史、フレイベル、オーウェン、モンテッソリーの人物伝や教育思想、発達の条件について、生得説として家系調査法を、経験説として野生児の研究を紹介している。

以上この本の概略について述べたが、この本を一読することによって、私たちの保育の対象である幼児の、成長発達について、いちおうの理解をもつことができる。欲をいえば、幼児の指導技術にかんして、もう少し多くの記述がほしかった。

関書院発行定価三八〇円
(市川学園幼稚園)